

■沢田教一 報道写真家。ベトナム戦争の従軍カメラマンとなり、日本人2人目のピューリッツァー賞も、取材中に横死。

さわだきょういち

三二六事件・1936＝ 青森市寺町で、郵便局員の家の長男に生まれる。

日中戦争始・1937＝ 1歳：

四人の弟妹ができる。

日米開戦・・1941＝ 5歳：

敗戦・・・1945＝ 9歳：

戦後、父は酒に溺れ、母が裁縫教室を開いて生計を立てるなか、父親の役割をつとめながら、

極東裁判決・1948＝12歳： 青森市立沖館中学校に入学、

三大事件・・1949＝13歳： 新聞配達で貯めた金で初めてカメラ買い、写真と出会い、中学校の英語教師から写真技術の手ほどきを受け、新品のミノルタ製6×6cm判カメラを譲られる。

独立回復・・1951＝15歳： 青森高校に進学、寺山修司と同級になる。授業をさぼって一緒に映画を見に行くこともあったが、特に親しい間柄ではなかったという。

自衛隊発足・1954＝18歳： 卒業し、早大を受験するも失敗、

55年体制始・1955＝19歳： 再び失敗すると、進学をあきらめ、青森市の小島写真店にアルバイトとして就職。間もなく三沢基地内の分店に移った。働きながら写真技術を習得するとともに店主で写真家の小島一郎の影響を受け、ロバー＝キャパの「イメージズ・オブ・ウォー」やアンリ・カルティエ＝ブレッソンの「決定的瞬間」に驚き、憧れるようになり、中古でライカM2を入手。

国連加盟・・1956＝20歳： 11年上の田沢ハタと出会い、結婚。妻がよく米兵を招いてパーティを開いたことから、英語とアメリカ兵との付き合い方を覚えて行く。カメラで立とうと、

安保闘争・・1960＝24歳： 青森ロッジでフリーメイソンになる。

イタイタイ病始・1961＝25歳： 二人で上京、職業安定所に通ううち、偶然三沢戻りの米兵に出会い、募集を教えられてUPIに入社。内勤業務だったため、在京の新聞社への転職を考えるも、妻に実力主義の良さをさとされて思い留まる。

TV宇宙中継始1963＝27歳： ベトナム戦争が始まるとカメラマン共通の現場への欲求が起こり、写真編集長の内勤がますます不満、PAN A通信社の岡村昭彦が日本人ジャーナリスト最初のベトナム入りに欲求が抑えがなくなったところ、

東京リベンジ 1964＝28歳： *皇太子夫妻の訪タイを取材しての帰りに香港で岡村昭彦と会い、ベトナム取材の決心を固める。週2回写真と記事を送ることを条件に{信濃毎日新聞}など8社が各々150から200ドルの取材費を出すことになって、

大学紛争始・1965＝29歳： *休暇をとって自費取材、この取材中撮った写真により、ようやくUPI通信サイゴン支局特派員として赴任、「安全への逃避」を撮影し、ハーグ世界報道写真展大賞とニュース部門第1位を獲得し、授賞式に参加。

いざなぎ景気1966＝30歳： 続いて、アメリカ海外記者クラブ賞第1位を受賞、さらにピューリッツァー賞を受けると、後UPIとライバルだったAP通信は二倍の給料を提示し、またナショナルジオグラフィック協会からも引き抜きがあったが、どんなに好条件を出されても全く応じなかったため、「サムライ・フォトグラファー」と呼ばれるようになる一方、周囲のねたみが起こり、続いてハーグ世界報道写真展で「泥まみれの死」が第一位、「敵を連れて」が第二位になって、激化、もともと寡黙なところますます寡黙になり、マグレで無いことを示そうと焦る。

震ヶ関バトル 1968＝32歳： *テト攻勢の中、フエ王城攻防戦に参加、この時の写真は戦場カメラマンとしての頂点をなすもので、第26回USカメラ賞を受け、手記が{毎日新聞}夕刊第一面に掲載されるが、ベトナム滞在があまりに長期に渡り、香港支局が人手不足と、UPIから要請されて、香港支局写真部長に転勤。最初断ったが、戦場疲れもあり、戦場カメラマン以外の可能性を考え受諾。しかし、赴任後は、最前線から離れて悩んでいたという。

全共闘・・・1969＝33歳： 一時帰国し、

大阪万博・・1970＝34歳： *再びサイゴン特派員に赴任、カンボジアでクーデタが起こりプノンペン支局に転勤、クメール・ルージュに拘束されたが、無事帰還し、何事もなかったかのようにまた取材に出かけ、メコン川を渡り逃げて来たカンボジア難民4人を撮影するなど、戦線取材中、何者かに銃撃を受けて没した。所持していた愛機のライカは持ち去られたという。